

学術書を書くということ

橋 宗吾（名古屋大学出版会）

はじめに

こんにちは。名古屋大学出版会の橋と申します。今日は、大学出版の先輩である北海道大学出版会さんのお招きでやってまいりました。ふだんは本を編集するのが仕事で、あまり人前でお話するということがありませんので、お聞き苦しい点もあるかと思いますが、どうかよろしくお願いします。

「学術書を書くということ」というお題をいただいておりますが、お話しするのは、本を書くノウハウといったことではなく、現在、学問の世界で書物というものが見えにくくなっている中で、学術書とは何か、それを出版するとはどういうことか、について、日ごろ学術書出版の仕事を通じて考えていることを、すこしお話しできたらと思っています。

ちなみに、学術書を書くノウハウ的なことならについては、今なら大学でアカデミック・ライティングの授業などもあるでしょうし、他にも、われわれ大学出版部の仲間である京都大学学術出版会の鈴木哲也さんたちが書かれた『学術書を書く』という本も出版されています。出版自体に関しても、たとえばコロンビア大学出版局の元編集長ウィリアム・ジャマーノさんの『学術論文出版のすすめ』という本が慶應義塾大学出版会から出ています。ジャマーノさんの本はアメリカの例ですから、日本とは違う部分もかなりありますが、両方ともいい本ですし、特に、博士論文を土台にして初めて本を出したいと思っておられる方にはかなり参考になるのではないかと思います。

それで、今日の話のロードマップですが、最初に、学術書の出版社、と言っても、われわれが働いている大学出版について、少しだけお話ししたうえで、本題に入りまして、まず大学、アカデミアの世界で学術書が見えにくくなっている理由と、それを通して、学術書の位置づけについて考えてみます。そのあと、読者、しかも一番コアの専門家だけではなく、それよりも「一回り、二回り広い」範囲の読者を考えることの意味についてお話ししてみたいと思います。それによって、今日お集まりの皆さんが学術書を、特に専門とはズレた学術書でも、もっと読んでみたいとか、あるいは自分でも書いてみたいと思っていただければ、とてもうれしいです。

ということで、まずは、われわれが働いている大学出版について少しご紹介させていただきます。

1 大学出版（UP）とは——大学と社会を結ぶ知のネットワーク

大学出版は英語で言うとユニヴァーシティ・プレス、略してUPということになるのですが、イギリスとアメリカで特に発展していて、元祖イギリスのオックスフォードとケンブリッジがとにかく古い。500年ぐらい前からありますし、規模も大きく、グローバルに展開しています。

アメリカの方もハーヴァードなどは、大学が出来た17世紀から出版活動をしていますから、大学の歴史がじつは出版の歴史でもあるのですが、ただ、UPとしてはそれほど古いわけではなく、米国では、やっと19世紀の終わりぐらいからたくさん出来てきます。

日本では、何とんでも早稲田大学出版部が古いですし、慶應義塾も、大学出版とは名乗っていなかったものの、福澤

論吉が積極的に出版活動を行っていました。しかし、東京大学出版会を含めて大半のUPが出来たのは戦後で、アメリカの方をモデルにしました。

私が働いています名古屋大出版会が出来たのが35年前。そのとき国立大学では、東大の他に、ここ北海道と、それから九州には出来ていました。だから先ほど先輩と言ったわけです。ちなみに名古屋は、出版社がたくさんある東京と関西のはざままで、しかも大学の規模も小さいから、うまくいくはずがないと言われていました。それを、北大出版会さんからもずいぶんとアドバイスをいただいて、なんとか目鼻がついたものですから、そのあと、有体に言えば、名古屋なんかでもやれるんだからということもあって、かなりの大学出版部が出来ました。今は50をはるかに超えています。

その中で、以前から「大学出版部協会」というのを作っているのですが、それに加盟しているところが31。もちろん私立大学が母体のところもありますし、かたちも、株式会社や一般財団法人、大学の一部などさまざまで、完全に独立採算のところから、大学の経済的支援を受けているところまで、かなりの幅があります。出版しているのは、基本的に、大学での研究をもとにした研究書・教科書・教養書ということになりますが（これらをひっくめて学術書と呼んでいるわけですが）、母体の大学に密着して、その大学の先生の本だけを出している出版部と、それ以外の研究者の本も広く出している出版部があります。

名古屋大学出版会は独立採算で、中部地方に軸足がありますがオープン型ですし、北大出版会さんも同じく独立採算で、実質的には北大限定ではなく広くこの地域の学術書の出版センターという役割も担っておられると思います。

ちなみに『大学出版』という雑誌も発行しています。

ざっとこんなふうに、かたちはいろいろながら、お互いに協力して、切磋琢磨もする中で、全体として、「大学と社会を結ぶ知のネットワーク」——これは大学出版部協会のキャッチフレーズなのですが——になろうとしてきたわけです。

しかし今、ここに葛藤をかかえています。それは、大学と社会を結ぶことの意味が非常にわかりにくくなっている、そのせいで書物が見えにくくなっているからです。これは大学や学問の変化によるものでもありますし、社会の方の変化にもよっています。そしてこのことが、今日のお話そのままつながってくるわけです。

2 学術書はどこにあるのか——見えなくなった書物と、知識の作品性

ここからが本題です。

今日お集まりいただいている方はおそらく本に関心をお持ちの人が多くでしょうから、「学術書はどこにあるのか」と言われても、ご自身の回りから本がすっかりなくなっているということはないだろうと思います。しかし、そうではない人もたくさんいて、研究者の中にも増えている、といいますか、その方がマジョリティになっているのが現状でしょう。

そのせいで、いま大学の中で書物、本というものの場所が、なくなっている、とまでは言わないとしても、よくわからないものになっているのではないのでしょうか。

これはもちろん、このかん言われてきた人文・社会系の学問への締めつけとも関連していますが、いわゆる大学改革という角度からは多くの方が議論されていますから今は立ち入りません。

ここでは、書物という角度、書物というメディアと知識のあり方との関係、から考えてみたいと思います。そのためにまず、本のない研究室のことを糸口にしてみます。

今から十年ぐらい前のこと、さる高名な自然科学系の先生のお部屋にうかがったのですが、そこにはすでに書物というものがほとんどありませんでした。隣に秘書さんのいる控室がありましたから、そこには多少あったのかもしれませんが、先生の机にプリントアウトした論文が置かれている以外は、テレビドラマにでてくる会社役員の部屋といった感じで、きれいなのですが、がらんとしていて、落ち着かないものでした。正直なところ、かなりショックを受けました。

しかし、ショックはそれだけではありませんでした。じつはそこには、国が学術書にたいしておこなっている出版助成の必要性を説明するためにおうかがいし、それについては或る程度のご理解を得られたのですが、その先生とお話しをする中で、そもそもの認識のギャップにかなり愕然としたのです。その先生のお部屋だけではなく、頭の中にも、本、書物というものが存在しない。論文はあるのですが、本、書物はなかったのです。いや、さすがにそれは言い過ぎで、少しはあるのですが、人文・社会系分野の特殊なカテゴリーか、教育用のツールということで、ほんの少し、片隅にあるという感じで、逆に頭の中に、確かなものとして存在するのは、あくまで論文でした。

ですから、そのときの当面の目的はうまくいったのですが、こちらが用意していった説明の言葉が理解されたとはとても思えませんでした。そして、こういう理系の先生にも理解してもらえるような言葉で、学術書、本というものが必要な理由をきちんと言えなくてはダメだ、と強く感じたわけです。

皆さんは、学術書と論文の違いは、どこにあると思われますか。つまり、研究者が書く論文というものと、同じく研究者が書く学術書との違いです。長さでしょうか。それならば、長い論文もありますし、ややこしいことに、論文を集めたような本もあります。もし、違いがないのであれば、「論文だけあれば十分で、まァ本もあっていいけれど所詮はおまけだ」といった声に対して、どう答えられるでしょうか。

これは、学問分野の違い、おおざっぱに言うと理系と文系の違いという問題にも関わりますが、それだけでは言い尽くせない部分があります。

しかしそのときは、学問論や科学論、あるいは書物論の中に、うまくそれに答えられそうな議論は見つかりませんでした。知り合いの科学哲学者や科学技術社会論を研究している方にも尋ねてみたのですが、ぴったりの議論はないようで、せいぜい、「学問分野・専門性の違いとそれによる問題をどう捉えるのかということはとても重要だし、自分も考えたいと思っているが……」といったお返事でした。

それに、学術書の存在理由という問題は、たしかに学問分野の違いということで科学論として考えられるものでもありそうなのですが、それだけではおそらく不十分だと思いました。同時に、学術書の出版は自分たちが日々おこなっている仕事でもありますから、それについては、学術書編集者としての自分の経験を手放さずに考えたいという気持ちもありました。ということで、それをめぐってぐるぐる考えていったわけです。

その中でひとつ気がついたことが、そもそも論文自体に違いがある。同じ「論文」という言葉で呼ばれていても、学問分野によって位置づけが大きく違う、ということでした。といいますか、それぞれの学問分野が社会の中でもっている位置や、内部構造も違いますから、それぞれの分野で書かれている論文の意味も違う、ということに気がつきました。

わかりやすい例として、機械工学という分野の論文と、歴史学という分野の論文を比べてみますと、機械工学の論文で

あれば、実験にもとづいた速報性が重視されるのに対して、歴史学の論文では、史料を読むことにもとづいた叙述性が大切にされます。また、機械工学ならば、世界規模の専門家にむけて、英語で書くことが推奨されるでしょうが、歴史学、特に日本史でしたら、まず日本語で書くでしょうし、書物のかたちをとることで読者は、狭い意味での専門家の範囲を超えていく場合がしばしばあります。そして、よく言われる、何の役に立つのかという点でも、機械工学でしたら、論文の外に機械という物、マシンを生み出すことでその機械の利用者の役に立ちますが、歴史学の論文であれば、それ自体が「文」として読者の歴史認識やアイデンティティなどに働きかけるわけです。いわば論文自体がそのためのマシンだと言ってもいいかもしれません。

こういうふうには、論文のあり方に違いがあるというのは、一見あたりまえのようなのですが、理系・文系含めていろいろな先生がたとお話していると、他の分野でも自分の分野とまったく同じように——あるいは、自分の分野のやり方を当然の前提として——「論文」が書かれて、流通して、読まれているようにお話しになって、それがもつて大きな誤解が生まれているということが、はっきりと分かりました。つまり、同じ「論文」という言葉で、さうとう違ったものを指しているのに、お互いに気がついていないという状態です。

その結果として、多くの文系の研究者——ちなみに、「多くの」ということは、「すべての」ということではなく、そうではない例もいろいろあるということですが——がするように、いくつもの論文を積み重ねて、それを土台に体系化するかたちで学術書を書く、それを自分の研究のまとめ・区切りとする、そういう行動パターンやキャリアパターン、そこでの論文や本の位置づけといったものは、多くの理系研究者の視野の外に出てしまっているわけです。

別の言い方をしますと、多くの理系研究者にとっては、書物は、研究分野の包括的なレビューか、教育・啓蒙用で、どちらにしても二次的なものですから、多くの文系研究者のように、それが自分の研究のひとつの到達点で、時間的には論文より後から出来る書物の方がむしろ第一次的なものだということは、見えにくい。

逆に、論文や書物を文章と一体のもので自分の作品だと感じている多くの文系研究者からしますと、多くの理系研究者がやっておられるような、極端な場合には100人も共著者が並ぶ論文のかたちは、ほとんど理解できない。自分が実際に書いていないのに共著者とはどういうことなのか？というわけです。

他にもいろいろ挙げられるでしょうが、少なくとも、こういった違いを、いま多くの理系分野の論文が、電子ジャーナルを中心に流通していることをしっかり踏まえて考えることが、書物との関係を見るうえでは、どうしても外せない点だと思いました。

そこで私は、さきほど挙げた京大出版会の鈴木さんたちの本や、長谷川一さん——この方は、メディア研究者で以前は東大出版会にもおられたのですが——の名著『出版と知のメディア論』なども参考にしまして、おおよそ次のように考えました。

——今、「情報発信」というものが非常に強調されていて、猫も杓子も「情報発信」とおっしゃる。学問についても、「学術情報」という言葉があるように、知識を情報としてだけ捉えることが幅をきかせている。そして電子ジャーナルもそうした考え方の中で動いているが、知識には、そうした情報としての側面だけではなく、いわば身体性に根ざした、しかも体系性や全体性を志向するような側面もあるはずだ。それを、長谷川さんが言うように、知識の、作品としての側面だと捉えられるのではないか。

つまり、知識には、情報としての側面と、作品としての側面があるのではないか。そして、論文は知識を担うものという点では共通しているわけだが、その中には（つまり、ひとくりに論文と呼ばれてしまっている文章の中には）、

情報としての側面が強い論文と、作品としての側面が強い論文、の二つがあるのではないか。この、情報性の強い論文と、作品性の強い論文との違いが、おおよそ（あくまでおおよそですが）理系と文系の論文の違いに対応していて、情報性の強い論文の方が電子ジャーナルなどには適応している、あるいは適応する中でさらに情報性を強めてきた。それに対して、身体性をもって体系性・全体性をめざす、作品性の強い論文の方は書物へと展開していき、そこでこそ完成する、と捉えるわけです。

そうしますと、今のアカデミア、つまり、ジャーナル論文中心の理系の学問モデルが支配的になっている大学、学問の世界で、なぜ書物というメディアの位置づけがわかりにくくなっているのか、その理由を、知識のあり方の問題と関連づけて捉えられます。

さきほど、論文と書物の違いは？という問いかけをしました。実際の違いは、論文自体の違い、いや、知識の二つの側面・方向性にあって、論文の違いは、情報性と作品性の度合いの違いによっており、実際に存在するのは、情報性の強い論文と作品性の強い論文、および後者が展開して完成した書物なのです。

そして、大学や学問をめぐる言説や政策の中で、知識の情報としての側面にばかり焦点があたることで、作品としての側面が見えなくなって、とうぜん、それを体現した書物も見えなくなっている——そういう構造がわかるわけです。

もちろん、それでよいというわけではありませんし、事が終わるわけでもありません。では何がいけないのか、ということになります。ここでは先を急がずに、知識の身体性や、全体性・体系性について、少し注釈を加えておきます。

まず身体性というのは、人間が物質的なものでもあって、時間的・空間的に限られている、有限だ、ということと同じです。時間的な有限性というのは、究極的には個々の人間の生命の時間に限りがあり、生まれてきて、やがては死んでいくということ。空間的な有限性というのは、身体が及ぶ範囲のこと。こう考えていただいて結構ですが、どちらもその外に「他者」がいることを意味しています。つまり、どんなにすごい知識を頭の中にもっていても、そのまま死んでしまえば身体と一緒に消えてしまいますし、しかしそれを伝えようとしても、テレパシーのようにはいかず、そもそも伝える相手がい、しかも何らかのモノ、あるいはモノによるコトを通してしか伝えられないわけです。ここで言うモノ、モノゴトは必ずしも紙の本のようなかたちをとってなくても、演劇のようなものでもいいわけですが^[1]、これが作品——正確にはメディアの中の作品——で、知識はかならずこういうモノないしモノゴトのかたちを取らざるをえない。大づかみには、それが知識の作品性ということで、その出来・不出来や労力のかけ方はおくとして、その根拠は人間が物質的で有限だということにあるわけです。言い換えると、人間の物質性、有限性と折り合いをつける仕掛けとして作品というモノ、モノゴトがあって、知識もそういった作品のかたちを取らざるをえない。そしてその作品の宛先は「他者」、あるいは「他者」と一緒に営む社会だ、ということになります。

[1] 演劇（的行為）を視野に入れることで、知識の作品性・情報性の概念を、日常的行為の中へと開くことができます。つまり、われわれの日常的な行為の中に、そもそも知識の作品性・情報性が存在し（これは、考えてみれば当然のことでしょう）、むしろそれが基礎となって、その度合いを強めた、ないしは強度を高めたもの一つとして、学問や芸術の営みがあると考えられるのです。ただし、そこにはメディアが必要であり、それなしには、学問や芸術も成り立ちません。そしてそのメディアについても、たとえば建築物がメディア性をもつものとして捉えられるように、書物や新聞、テレビやインターネットなどの、いわゆる「メディア」にだけ限定されるものではありません。こうした点からすれば、そもそも、「メディア」として通常理解されているものは、そうした一般的なメディア性をもつさまざまなモノないしモノゴトから、特定の特性を抽出した、メディアの中のメディアだと言えるでしょう。

抽出されたメディアの中の、強度を高められた作品は、われわれの日常的な行為全体の（その作品性の）比喩ともなっており、そのためもあって、多くの人に感銘を与えるのではないのでしょうか。逆に言えば、このように強度を高められた作品について、学者や芸術家の日常性を指摘することが（彼らの俗人としての側面に光を当て、そうした作品が日常的行為の一部でもあることを指摘するようなおこないが）われわれを白けさせるのは、それがあまりにもありふれた、一般的なことからでしょう。

それから、全体性・体系性ということの意味しているのは、知識の対象となる世界そのものとは区別された、世界像、世界についての全体的な観念・イメージとその構造を、論文なら論文のテキストに、どれだけ引き込んでいるか——歴史的な順序で言えば、どれだけ手放しているか——ということです。物理学などでは、この、引き込んでいる度合いが、きわめて小さい。つまり、宇宙の全体像、それについての知識の全体性・体系性は、基本的に論文の外にあって、研究者共同体に共有されており、論文はその一部を更新するために書かれるわけですが、一方、知識の全体性に言及することは、ぎりぎりまできりつめられています。これが歴史学ですと、たとえ知識の全体ではないとしても、つまり、世界の歴史の全体像ではないとしても、そのうちの或る程度まとまった部分を、いわば全体性の比喩として、書物に組み込んでいるわけです。そして、こういう、部分が全体の比喩にもなっているあり方が作品性の重要な要素になっていて、これが物理学の方ですと、部分はあくまで部分にとどまろうとするはずで^[2]。

そして、このように、作品となった知識の全体性・体系性は、情報としての側面とは別に、しばしば身体を通した、広い意味での美的な感覚、ないしは感動のようなものとして、個人的に、インティミットに経験されるのだと思います。私には、こういう経験がなければ、学問が動くとはとても思えないのですが、そうではないと考えている人がアカデミアに増えているのかもしれない。

以上で注釈はおしまいです。では、こういう知識の作品としての側面が見えなくなって、それを体現した書物も見えなくなると、何がいけないのか。それはどのようなかたちで現れてくるのか。いろいろな要素が関わりますが、特に社会との関係で、それは問題になってきます。たとえば、読者が見えなくなるというかたちで現れてくるのです。

そこで、次にこの点を考えてみたいと思います。

3 読者は見えているか——知的協同と市民的教養のために

現在、一方では、世界がシームレスにつながったとも言われるような情報の流通がありますが、他方で、同じことは情報爆発とも言われ、情報の流れの細分化、断片化という全般的な状況が指摘されています。こうした中で、知識の情報としての側面と作品としての側面は、大きく単純化して言うなら、情報のチューブによる送信と、作品の市場による販売、という回路によってそれぞれ流通しているように見えます。

つまり、学術電子ジャーナルであれば、ジャーナルという電子チューブを通じて学術情報を流す。ユーザーから見ると、ジャンル名やそれを暗示するタイトルがついたチューブないしはチューブのセットを、主として研究機関（特にその中の図書館）が購入して、それを研究者が利用するというかたちをとっています。もちろん、そこに市場がないというわけではありませんが、学術ジャーナル出版社から研究機関がチューブのパッケージを購入する（いわゆるB to Bモデルが中心の）かたちになっているため、ユーザーには市場が意識されにくいと言えますし、少なくとも、チューブを流れる個々の学術情報の単位、すなわち論文を購入するという意識は乏しいと思います。

これに対して、学術書であれば、一つ一つが別個の名前をもち独自のアイデンティティをもった——つまり、身体性・全体性・体系性をもった——独立した作品として、書店等の市場を通して、主として個人の読者が購入します。もちろ

[2] ちなみに、議論をいたずらに複雑にしないために、ここでは全体性と体系性を一体のものとして扱っていますが、今の話との関連で一つだけ付け加えておくと、体系には、中心部と周辺部、ないしは基底部分と表層部分があって、中心部での書き換えは全体への影響が大きいものに対して、周辺部での書き換えは全体への影響がほとんどない、という関係にあると考えられます。したがって、中心部を書き換える論文は、たとえ論文自体への全体性の引き込みは少ないとしても、論文の外部で研究者共同体に共有されている全体性へのインパクトは大きいわけです。しかしそのことは、ここで言っている作品性とは別のことがらで、全体性の比喩であるわけでもありません。

ん、その流通システムを大きなチューブと捉えることもできるかもしれませんが、図書館による購入も無視できませんが、大多数は個人が、ネット書店を含めて書店から購入する（いわゆるB to Cモデルが中心の）かたちになっているため、その都度の買うという行為の中で、個々の作品を購入するという意識が大きく働くと考えられます。

こういう流通の形態は、電子ジャーナルによる学術情報が、特定の、つまり専門の研究者共同体の内部に、ほぼ範囲が限られるかたちで流通する、というあり方に対応しています。逆に言うと、その流通範囲が専門性の外延、境界線を示すことにもなっているわけですが、こうした専門性のあり方を、東京大学の藤垣裕子先生は「ジャーナル共同体」と呼んでおられます。もちろん、これは紙媒体を中心とする時代からそうだったのですが、それがいっそう強化されて、極端化しているのだと思います。

これが専門性の密度を高めるといって好ましい部分をもつことはたしかですが、他方で、専門分野の細分化を推し進めて、いわゆるタコツボ化をいっそう悪化させていることも間違いないでしょう。これについては、少し前に、電子ジャーナルによる学知の狭隘化ということで、シカゴ大学のJ・A・エヴァンズさんが『サイエンス』誌に論文を発表していましたし、昨年日本語訳の出た『サイロ・エフェクト』という本などでも指摘されているところです。

こうした学知の情報化は、その量による評価、つまり論文数が多いほど良いという価値観を伴っていて、このことをよく示しているのが、MPU、つまりMinimum Publishable Unit＝「出版可能な最小の成果単位」で論文を書け、という考え方です。そこには、論文の数を増やすということにくわえて、余計なことを書くと査読を通りにくいという考慮もはたらいっているようですが、その反面、知識の全体性や体系性の引き込みはなく、それは、まったく論文の外にゆだねられてしまっていて、そういったものへの接触、接点を極力小さくするという姿勢が表れているように見えます。さきほど指摘した物理学などに見られる論文のあり方が、極端に押し進められているわけで、もちろん、論文の作品性への配慮は極限まで希薄になっています。

そしてこうした、量による学知の評価が、論文数の大量化をもたらし、学術電子ジャーナルの価格の高騰化の大きな要因となっていることも、すでに指摘されています。ちなみに、この関連でよく言及されるオープンアクセスも、論文の量産に貢献することで、量による評価自体を転換することにはつながっていませんし、むしろこうした傾向を助長する面があることを認識しておく必要があります。

こうした学術情報の大量化が、さきほど言いました学知の細分化、狭隘化を推し進めていることは見て取りやすいでしょう。その結果として、専門性による学知の分断、ないし専門性への分断がいっそう進んでいるように思われます。つまり、たんに専門性が高度化して細分化が進んでいるだけではなく、個々の専門性が過度に強調されてしまう——これは当事者の意識としても、それが置かれている環境や仕組みとしてもということですが——事態になっていると考えられるわけです。

これに対して、学術書は、そうではない、あるいは、そういう傾向を是正するものだと、次に言いたいのですが、その前にまず、学術書という言葉によって何を指しているのかをはっきりさせておく必要があるでしょう。

さきほど、大学出版部をご紹介した際に、研究書・教科書・教養書を出版していて、それをひとくりに学術書と呼んでいると言いました。それぞれ、「大学における研究成果の公表」、「学部・大学院レベルの学生・院生の教育への寄与」、「研究成果をかみ砕いて一般社会に知らしめること」という役割を担っているとされます。

それはそれで間違いではなく、それぞれの書物の中心がどこにあるのかをはっきり意識しておくことは大切なのですが、しかし、この捉え方は誤解を招きやすい面もっています。皆さんは、どこがいけないと思われませんか。じつはこ

の捉え方ですと、研究書を、教科書・教養書と区別することで、研究書を、さきほど見た電子ジャーナルと同じように、狭い意味での専門家共同体、「ジャーナル共同体」の内部に閉じたものだと考える錯覚を起こしやすいのですが、それは間違いです。このことを、次に学術書の流通システムと、読者のあり方から見てみます。

まず大事なのは、さきほども言いましたように、研究書も、教科書・教養書も、いずれもが、主に書店、ネット書店を含めた本屋さんを通じて流通しているということです。しかも他の、いわゆる一般書などと一緒に、です。

これは日本の書店、出版流通システムのよいところなのですが、雑誌と書籍を分断しないだけでなく、一般書と専門書、あるいは教養書・教科書と研究書との間も分断しない、という特徴があります。東大出版会の橋元博樹さんはこのあり方を「一元的なプラットフォーム」と呼んでいます。（ちなみに、ここで言う雑誌には、もちろん学術電子ジャーナルは含まれていません。）たしかに、実際に研究書を置いているのは、大書店やかなりの専門性をもった書店、大学などに入っている書店だったりするのですが、諸外国のように流通システムが分断されているわけではなく、どんなに小さな書店さんでも、注文すると、研究書でも（市販されている本なら）、他の本と同じように届きます。その点が重要なのです。

そしてその読者の方も、じつは単純に、研究者と、学生・市民とに分かれるわけではありません。われわれは、とみるとすぐに、専門家と素人、ないしは専門家と市民というような二分法で捉えてしまいがちですが、現実の中では、単純に二つに分かれるわけではないのです。

専門家といっても、研究テーマや対象が完全に一致するコアの専門家から隣接領域の研究者まで、専門性の度合いに差異をもちながら、研究書の読者になっています。他方で、素人や市民といっても、なんらかの専門家であることも多いですし、それは別としても、それぞれの関心から勉強されて、たとえばご自分の病気についてたくさん勉強して、ある程度の専門性を備えている人もいます。もちろん、だからといって治療行為を行えるわけではありませんが、それについて読んだり話したりできる、つまりコミュニケーションできるということです。

すこし乱暴ですが、いま仮に専門性の度合いを100%から0%までの幅で考えますと、ある分野の100%専門家でも、他の分野ではそうではありません。しかし完全な素人かということ、70%くらいの専門性をもっている場合もあれば、30%くらいの場合もあり、30%の方はさすがに専門家とは呼べないでしょうが、70%の方は場合によっては専門家としてふるまいますし、そう見なされもします。たとえば、専門性が問われる、いわゆる査読のような場面でも、100%専門家が査読を担当することは案外多くなく、少しズレた研究者が担当していることが多いのではないのでしょうか。

もちろん、0から100までが、なだらかな傾斜をなしているということではなく、段差がありますし、研究分野といった次元だけでなく、テーマや方法などさまざまな次元が複雑にからみあいます。また、とうぜん質的な違いもありますから、以上はあくまで大づかみな話なのですが、専門家と素人との単純な二分法よりは、現実に近い像だと思いますし、特に読者について考えるにはこちらの方が有効です。

そして、教養書や教科書が100%専門家以外の人たちに読まれるというのは当然だとしても、研究書の方も、100%の専門家だけでなく、たとえば専門性が70%の人、あるいは50%の人にも読まれる、ということが大事なのです。つまり、研究書の読者は専門家だけ、教養書・教科書の読者は素人だけ、という捉え方は、じつさいの読者の範囲を狭めるものでしかありません。

これは、本質的には、学術書が全体性や体系性をめざして、作品として市場で流通していることによっています。そし

て、日本の書店、出版流通システムは、これまでこういうあり方に対応してきましたし、われわれ学術書の出版社も、著者の方々に、本をまとめるからには、隣接領域、隣り合う分野の研究者や、この本のテーマ・問題に知的な関心をもつはずの読者、つまり「一回り、二回り広い読者」に、なるべく開いた言葉で語ってくださいとお願いして、こういうあり方に対応した編集や販売を心がけてきました。そういう努力も含めて、これまで日本の出版システムが日本の学術インフラを担ってきた、と言われるわけです。

これは、研究書を研究書以外のものと同じように流通させることで、それが作品として読者に受けとめられるのを促してきた、ということですから、研究書を情報の器とだけ見る視点からすれば、無理なことをしているように見えるかもしれません。しかし、知識がもともと作品性と情報性を二つとも備えたものだということを思い起こせば、ほんとうは無理なことでもなんでもなく、もし逆に今それが無理に見えるとしたら、現在のあり方のほうが異常だということです。

要するに、学術書は、たとえ研究書に限ってみたとしても、ジャーナル共同体としての専門家共同体——学術電子ジャーナルの読者である専門家共同体——とは、異なった広がり、「一回り、二回り広い読者」をもちえているということです。にもかかわらず、情報中心、電子ジャーナル中心の現在の大学、アカデミアの体制の中では、書物が見失われることで、こうした読者も見失われてしまっているわけです。

しかし私は、今後も、こういう「一回り、二回り広い読者」を大切にするべきだと思います。なぜならそれは、知的な協同にもつながりますし、市民的教養をつちかうことにもつながるからです。

このうちまず、知的な協同、協力、コラボレーションについては、たとえば、東日本大震災への対応を思い出していただければその必要性ははっきりしているでしょうし、もっと一般的に、環境問題などの現代的な問題が、特定の専門分野だけでは解決できない複合性をもっていることは、少し前に亡くなったウルリッヒ・ベックさんなども指摘していました。さらにそういうタイプの問題だけではなく、たとえば、或る歴史的な現象の解明といったことでも、知的な協力の必要性が感じられることは、しばしばあるのではないのでしょうか。

研究者だけがこういったコラボレーションに関わるわけではありませんが、仮に研究者に限ってみたとしても、そのためには知的な共通基盤が必要になります。そして学術書の、100%専門家ではない、「一回り、二回り広い読者」というものは、部分的な専門性をそうした知的な基盤とすることで、知的協同、協力を行える可能性をもつことになる、というのが、ここで言いたいことです。あえて言えば、知識人性をもつことになる、と言ってもいいでしょう。

そして、もう一つの、市民的教養の方は、われわれが生きている民主主義的な社会で、市民の判断や参加のために、それが必要だというのはほぼ自明だと思います。ただ、教養と言うと、文系、古典、といったイメージをお持ちの方もおられるかもしれませんが、それだけではなく、理系の知を含めたものとして考えるべきです。さきほど言いました環境問題ひとつとっても明らかのように、科学技術の占めるウエイトが大きくなった社会に暮らしている以上は、理系的な教養が必要な場面が増えていることは間違いないからです。

こういった市民的教養がさらにどういうものを含むのかを示すものとして、最初の方でふれた『大学出版』の105号に、慶應大学出版会上村和馬さんが書かれた「未来の愛書家を育てる」というエッセイがありますので、その一部を引用させていただきます。私の本を編集してくれた人ですが、これは彼が一昨年モスクワの国際図書展に参加したときの文章です。ここまで、すこし日本の出版システムに即して話し過ぎたきらいがありますから、それを開いておく意味もあります。

「2015年11月13日、パリで同時多発テロが起きた。17日には、エジプト東部で起きたロシア機の墜落について、ロシア政府がISによるテロと断定し、シリア領内のISの軍事拠点への空爆を強化した。第17回モスクワ国際……ブックフェアはそのような時期に開催された。……[だが]今回特に印象に残ったのは、……モスクワ図書展は「本を愛する市民のためのお祭りの場」「未来の愛書家を育てる場」[になっているということだった。そして]……滞在当初はテロへの不安が無いわけではなかったが、ロシアの方々との交流をとおして、本を介した草の根の民間交流、相互理解の促進がいかに大切か改めて学んだ。他者を知ろうとするなら、まず彼らについての本を読み、実際に会って、話して、自分の考えを伝えること。彼らの声に耳を傾けること。相手を知るために言葉を尽くすこと。そのような地道な交流をひたすら続けることでしか、世界はよくなるかと改めて思った。国際ブックフェアにはそのような存在理由もあるのだと思い至った。そう遠くない将来に、イラクやシリアの地で、子どもたちのための国際ブックフェアが開催されることを願う。」

この文章で述べられているのは、もちろん学術書に限ったことではありません。しかし、こうした国際ブックフェアにも、学術書は、他のさまざまな本と並んで出品されているわけです。つまり、学術書という書物は、こういったかたちでも読者に開かれていて、そのことは市民的教養を広げ、深める支えになっていると思います。

学術書が読まれる範囲は、それが作品として市場で購入されるというあり方からしても、あらかじめ決まっているわけではありません。その本が創造的に生み出していくものですし、コアの専門家の範囲を超えて、しかも目の前の社会だけではなく、それを地域的にも、時間的にも超えていくわけです。つまり、他の地域や未来の読者をも含んでいく。ただし、電子ジャーナルとは違って、あくまで少しずつ、ゆっくりとです。そこには、たとえば翻訳するということも含まれますし、読者を育てるということも含まれます。そういうあれこれを含みながら、少しずつ、ゆっくりと読者をつくりだしていくのです。それが、「情報発信」と呼ばれているものとは、大きく違う態度だということはお分かりいただけるはずです。そして私は、知識というものが、こういった読者への回路を決して手放してはいけなさと考えます。

ただし、最後に言っておきますと、だからといって、学術書だけがよくて、ジャーナル論文がダメだ、といった単純な話ではありません。学術書にもさまざまな制約があります。ですから、たんに物事を逆転させて、今度は書物だけを持ち上げれば良いというわけではないのです。むしろ、二つの方向は、互いに補い合う関係にあるはずです。繰り返せば、知識というのは、情報性と作品性のどちらか一方だけで成り立つものではありませんから、片方だけ強調すれば、うまくいかないわけです。作品性の強いメディアと、情報性の強いメディアがあつていいし、あつた方がいいと思います。その際、すべてのメディアに、じつは両方の要素が含まれているということを忘れないようにしなければなりませんし、両者が、ある種の緊張をもって補い合うこと、それが大切なのだと思います。

この点に関わって、19世紀イギリスの知識人J・S・ミルが「半真理 (half truth)」ということを言っています。人間と社会を研究する際に「絶えずつきまとう危険」は、「虚偽を真理と誤認することであるというよりはむしろ真理の一部をその全体と誤解すること」だ、というものです。裏返して言えば、それぞれの主張や理論が、真理の全体ではないが一面は突いている可能性がある、それゆえそれらは傾聴に値し、またそれゆえ言論や学問の自由は認められ、維持されるべきだ、ということです。私は、この考え方は、主張や理論だけではなく、学問分野やそれに対応する知識のあり方、またそのメディアのあり方にも当てはまると思っています。

おわりに

話が長くなりましたが、最後にもう一つだけ、付け加えさせていただきますと、現在、出版や公表の機会自体は、減っているというよりは、むしろ増えている状況にあります。しかし書物について言えば、著者にとっても、読者にとっても、相対的に希少で、貴重なものとなっているのが、よき編集との出会い、よき営業との出会い、つまりは、よき

publishingとの出会いです。そして言うまでもなく、当地には北海道大学出版会、もうすぐ創立50年を迎えられる伝統と実績ある大学出版部がありますから、その点でのアドバンテージは大きいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

<参考文献>

- 有田正規「論文数はどれほど重要か——置き去りにされる質」『科学』80巻8号、2010年
- カスリス、トマス『インティマシーあるいはインテグリティ——哲学と文化的差異』衣笠正晃訳・高田康成解説、法政大学出版局、2016年
- 上村和馬「未来の愛書家を育てる」『大学出版』105号、2016年
- 小林傳司『トランスサイエンスの時代——科学技術と社会をつなぐ』NTT出版、2007年
- コリンズ、ハリー『我々みんなが科学の専門家なのか?』鈴木俊洋訳、法政大学出版局、2017年
- ジャマーノ、ウィリアム『ジャマーノ編集長 学術論文出版のすすめ』松井貴子訳、慶應義塾大学出版会、2012年
- 鈴木哲也／高瀬桃子『学術書を書く』京都大学学術出版会、2015年
- 鈴木哲也「知のコミュニケーションの再構築へ——学術出版からランキングと大学評価を考える」、石川真由美編『世界大学ランキングと知の序列化——大学評価と国際競争を問う』京都大学学術出版会、2016年
- 橋宗吾『学術書の編集者』慶應義塾大学出版会、2016年
- 竹中英俊「福澤諭吉と出版業——「大学出版人の祖」として」『福澤諭吉年鑑』42、2015年
- テット、ジリアン『サイロ・エフェクト——高度専門化社会の罨』土方奈美訳、文藝春秋社、2016年
- 戸田山和久『「科学的思考」のレッスン——学校で教えてくれないサイエンス』NHK出版、2012年
- 日本学会会議『回答 大学教育の分野別質保証の在り方について』2010年
- 長谷川一『出版と知のメディア論——エディターシップの歴史と再生』みすず書房、2003年
- 橋元博樹「学術書市場の変化と電子書籍」『情報の科学と技術』65巻6号、2015年
- 橋元博樹「出版流通の変化から見た大学出版の課題」（報告原稿）、早稲田大学中央図書館開館25周年記念シンポジウム「日本における学術出版社と図書館の役割、その未来」2016年12月12日
- 藤垣裕子『専門知と公共性——科学技術社会論の構築へ向けて』東京大学出版会、2003年
- ベック、ウルリッヒ『危険社会——新しい近代への道』東廉／伊藤美登里訳、法政大学出版局、1998年
- ホウズ、G・R『大学出版部——科学の発展のために』箕輪成男訳、東京大学出版会、1969年
- 箕輪成男『情報としての出版』弓立社、1982年
- ミル、J・S『ベンサムとコウルリッジ』松本啓訳、みすず書房、1990年
- Evans, J.A., “Electronic Publication and the Narrowing of Science and Scholarship,” *Science* 321, 2008.